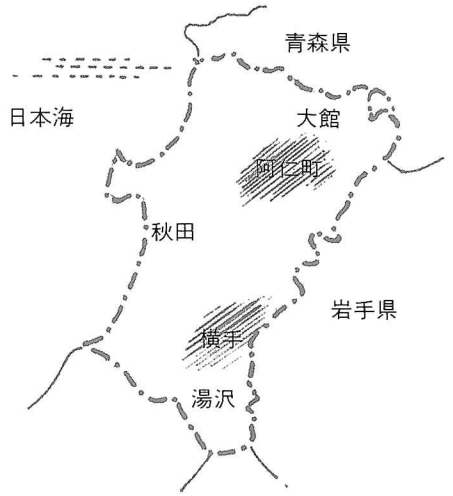


秋田県 横手市、阿仁町、その他

土着の信仰を包みこむ 秋田の法華サン



《人口減少》過疎化、高齢化の中で、檀家に頼れず、住職の別収入なしでは寺の維持が出来ない。

東北六県の中、唯一人口が減少している秋田県の中で(図表1)、もともと農地の少ない山間部では、鉱業、林業の不振の影響が大きく、職場がなくなって家族ぐるみ、あるいは若年層の人口流出が多い上、残された人々も高齢化が著しい。

○戸に減った上、老人ばかりで、法事、月回向も少なく布施収入があてにできない寺院、さらに住職の病氣入院でその存続すら問題になっている寺院もある。寺院護持の体制がすっかりしていないと、過疎地では冬場の雪おろしや暖房費など、建物の維持から住職の日常生活まで、やっていくのが大変な状況にある。

その一方、檀家一二戸で住職が教職と農業収入で頑張っている寺院、町と協力して観光化した寺院がある。さらに鉱山の廃業で秋田県一の過疎地となった阿仁町で(図表2)、戦後、夫人が人形作りで経済を助け、住職が「おみやさん」を組織化した。その結果、今では祭祀する七面様の信者が一万人近くにもなり、毎日ように信者が大型バスで訪れる寺院もある。

ここでは過疎地にあつて檀家に頼れず、住職の努力による別収入によつて寺院が護持されている。

《人口停滞》檀家の生活の安定が寺院護持の安定につながった。しかしその一方で転宗など変化を嫌う風潮を生じさせ、檀家数

図表1 東北六県 県別人口

	昭1980(昭55)年			1985(昭60)年		
	人口(千人)	増加率(千人あたり)	人口密度(1km ² あたり人)	人口(千人)	増加率(千人あたり)	人口密度(1km ² あたり人)
青森	1,524	67.5	158.5	1,524	0.4	158.5
岩手	1,422	36.9	93.1	1,434	8.2	93.8
宮城	2,082	144.6	285.6	2,176	45.1	298.5
秋田	1,257	12.4	108.2	1,254	-2.2	108.0
山形	1,252	21.5	134.2	1,262	7.8	135.3
福島	2,035	45.8	147.7	2,080	22.1	150.9
全国	117,060	1) 118.4	314.1	121,047	34.1	324.7

*1985年人口は概数で増加率は5年間の増減。1)沖繩を含む1970年人口より算出。

が増えない。

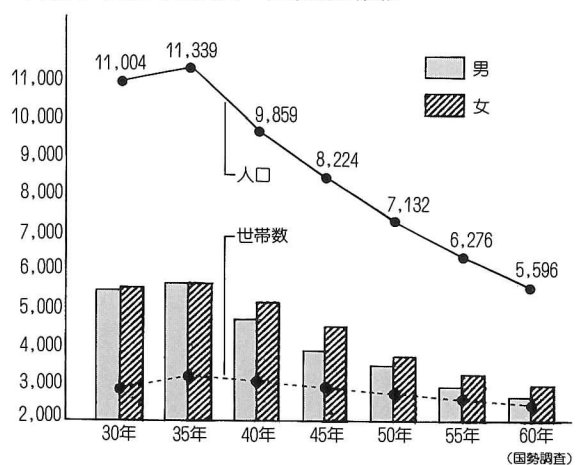
都市部、農村部の、ある程度大きな寺院は昔から封建領主、そして商人や地主階級の外護によつて安定してきた。戦後、寺院も疲弊したが、寺院の努力もあり、それまでの地主階級に代わつて小作農民だった人達が協力して、積極的に寺院護持にあたるようになった。

地縁、血縁に基づいたその結びつきは強く、経済的にも農業と出稼ぎによつて、十分とは言えないまでも安定している。その結果、寺檀関係は固定し、経済的にも安定した寺院護持の基礎が形づくられた。

海岸に近い農村地帯にあるA寺では、四八戸の檀家が協力的で、お布施・お供米を心よく出し、住職と子息の二人で祭祀行事、霊断、修法、そして手不足の他の寺院の手伝いを務めている。

農村部で若年層が流出していくものの、農地と職があつて長男が残れば、檀家は減

図表2 阿仁町の人口・世帯数の推移



らない。反面、他に大きな産業がなくて世帯数の増加がない上、本家分家の関係が強く改宗も出来ない状況で、檀家が増えることはない。新宗教各派も活動はしているものの、今一つ勢力を伸ばせないでいる。ただ御祈祷となると、他宗の人も信者として熱心な参拝があるので望みをもっている。

《檀信徒の獲得》昔からの宗派が固定した中で、寺院の門戸を広げ、修法や対話を通じて檀信徒との結びつきを強めてきた。

秋田県は禅宗の多い土地柄、地縁血縁の絆が強く改宗もなく、入寺以来少ない檀家で苦勞してきた老住職が多い。

A寺の住職夫妻は昭和二九年の入寺当時小屋同然の本堂を半分仕切つて住まいにしたが、天井からは星が見え冬には雪が吹き込んだという。そのような中、御会式には檀家四八戸のところ禅宗の人も来て、二



写真1 小作農民だった人達が中心となって復興したB寺本堂

〇〇〇三〇〇人分の食事を出したという。

B寺の戦前の御会式には、苦しい小作農民が二、〇〇〇人も集り、誰にでも平等にお膳やお酒が出された。また返されるあても無いのに税金の立て替えをしてやるなど、住職は人々にわけへだてなく接してきた。

戦後安定してきて寺が復興しようというとき、苦しいときにお寺に助けられたという小作農民だった人々が中心になって活躍した(写真1)。現在もその信頼関係が寺院を支えており、一般に日蓮宗のお寺は、熱心でいいねいと好感をもたれている。

またこの地方ではぬきにして考えることの出来ない「おがみやさん」を戦後の混乱期から寺院に集め、積極的に指導することで日蓮宗に近い信者を増やしてきた寺院がいくつかある。御祈祷は人が集りやすく、その人達と家族的ムードのつながりを継続

していくことで、地域やその人間関係にこだわることなく信者として集めてきた。他宗の地盤で少ない檀家を先代から受け継ぎ、苦勞しながら檀家と心通わせ、修法で他宗の信者を増やすことでどうにかやってきた。

《檀家の意識》檀家は、地元で親代々から日蓮宗を守り続けることを願っている。無住になったC寺、D寺を訪ね、それぞれの元総代に会った。

C寺の檀家一〇〇戸全部は同じ村の禅宗寺院に移り、創立以来二〇年D寺の三〇〇人の信者も法華宗などの檀家になった。両方とも菩提寺を変えるとき、他所(隣町)の日蓮宗ではなく、地元の他宗寺院を選んだしかし、「今でも気持ちは親の代からの日蓮宗」で、禅宗の寺院に行ってもお題目を唱え法華経を読んでいるという。

菩提寺は変わったが無住になったもののお寺は、親から、ひいては先祖から伝わったものだから守りたい。禅宗になっても寺の祭礼はしばらく続け、倒壊寸前の本堂も仏様だけでもなんとかしたいと考え続けてきた。しかし経費の点でむずかしい。今でも復興を考えているという。そこには地縁血縁が宗派意識に優先する姿が見られる。一方E寺は二〇年間住職が不在で、心ある三人の檀家を中心となって新たに護持会を結成、年一回の祭礼である御会式には働き盛りの人達を中心に参詣者が増えた。二〇〇戸の檀家が広範囲に散在しているものの、集落毎の結束が固くその数は減らないという。

その新役員の一人は「最近の坊さんは氣迫に欠け、寺を護るだけの姿勢に見える。

もつと檀家の心に訴えかける勇氣を持った布教をして欲しい。青年僧の唱題行や行脚には感銘を覚えた」と(写真2)。

檀家は寺や住職を護るためにお参りするのではなく、先祖からの日蓮宗であるがためにお題目を唱えている。

老僧が強い宗派意識で孤軍奮闘して寺院を守っても、一人よがりとなって檀家の氣持ちとズレを生じ、さらに後継者が居つかない理由の一つがこのへんに見える気がする。

《信者の固定化》靈感に頼らない布教を實踐して信者との結びつきをより強くしたい。秋田をはじめ東北地方では「おがみやさん」と呼ばれる民間信仰に頼る人が多く、本宗としても修法と関ってきた事実を見ると、その存在は大きい。「おがみやはいい加



写真2 坊さんはもつと氣迫を、と語るE寺の役員

減だ」としながらも前述したように積極的に取り込んで、本宗の信者としてその数を増やしていった寺院は多い。

中でも戦後多く生れた教会、結社は靈感があるとする人を中心に、多くの熱心な信者を集めている。禅宗の僧侶が、靈が憑いたと言ってお祓いを受けに来たり、医師が来たり、あるいは精神科医に勧められたと言ってくる人もあるという。

しかしご利益が中心のこの信仰形態は信者が流動的なことが問題であり、内容の面も含めていい加減とされる所以である。面接した二つの結社の担任は両方とも、信者の悩みには靈感に頼るだけでなく、なるべく話を聞いて上げることにし、法華経を説く布教を心がけていると語った。

こうした靈感などの民間信仰と本宗の布教の関わりについては、今後もつと突っ込んだ研究が求められている。

《まとめ》

戦後の時代の安定と住職の努力で、本宗寺院と檀信徒との結びつきは一般的に強い。檀家数は人口増減の少ない地域で因習にこだわらる風潮から変化がなく、過疎地では減少と高齢化が問題となっている。その中で、各住職はそれ相当の苦勞と努力をして成果も確実にみえる。その寺院を支えている檀家の意識は先祖供養が優先し、住職が「日蓮宗の寺院護持」にこだわると檀信徒の心との間にズレが生じる。

昔から「おがみやさん」や靈感と言った民間信仰が多く、修法も盛んであるが、一方でその不安定さ、内容的な面で問題点を指摘する声もある。